

書 評

山下清海：『新・中華街 世界各地で〈華人社会〉は変貌する』講談社、2016年9月刊、216p., 1,550円（税別）

著者の山下清海氏は日中国交正常化以前の1970年代から世界各地の中華街を調査研究し、中華街研究の第一人者である。本書は著者の最新研究成果である。本書の構成は、以下の通りである。構成に沿って、その内容を紹介する。

- 序 章 「中華街」から「新・中華街」へ
- 第一章 池袋で何が起きているか
- 第二章 世界各地の「新・中華街」
- 第三章 華人の〈食〉と現地社会
- 第四章 僑郷との絆
- 第五章 国家と政治と地域社会
- 終 章 華人社会の〈強さ〉とは何か

序章 「中華街」から「新・中華街」へ

著者は、チャイナタウンの歴史を概観したうえで、世界各地の中華街のシンボルである「牌楼」に注目して、その歴史と地域の特徴を解説している。それによれば、チャイナタウンは必ずしも観光地ではない。中華街は華人にとって現地でのゲートウェイであり、華人同胞の生活を支える生活空間であった。世界には、日本の三大中華街、熱帯植民地の中華街、新大陸の中華街など、形成の歴史によって様々な中華街がある。

第一章 池袋で何が起きているか

著者は、池袋駅北口周辺地域における新華僑による店舗立地の動向にいち早く注目し、2003年にこの地区を「池袋チャイナタウン」と命名した。

チャイナタウンの発展過程を二つの段階に分け、まず華人同胞を対象とした店舗や施設が集中する街が形成され、その後次第に華人以外の現地（ホスト社会）の人びとも引きつけるような商業地や観光地へと発展するとして、池袋チャイナタウンは第1段階から第2段階へとステップアップする過程にあると指摘している。

本書では池袋チャイナタウン形成の背景には、増加する新華僑に安価な賃貸住宅を提供できる池袋の住環境があったと分析している。しかし、新・中華街の形成は決して順風満帆ではなかった。ホスト社会や地元商店街との間に軋轢があり、中国人排斥の街宣活動やヘイトスピーチも行われた。著者自身もネット上で攻撃を受けていたという。

本書は池袋チャイナタウンと日本三大中華街との違いについて次のように分析している。池袋チャイナタウンには牌楼もなければ、鮮やかな赤や朱色を使った看板なども少ない。また、多数の観光客が訪れる段階には至っていない。今後、中国料理店を中心としたエスニック資源を活用すれば、観光地として発展していく可能性を含んでいる。

第二章 世界各地の「新・中華街」

この章では、世界各地に展開している新・中華街の形成、新華僑の生活、そして新・中華街の地域的特色を、中国との結びつきにも注目して分析している。

拡大するアメリカの華人社会に関しては、著者は次のように分析している。アメリカの華人口は1980年の81万人から2010年の401万人にまで膨れ上がった。これらの新華僑は伝統的なチャイ

ナタウンに流入するだけでなく、大都市郊外に新天地を求め、郊外型の新・中華街を形成するようになった。その事例として、ロサンゼルス郊外のモンレーパークを紹介している。裕福な台湾人が多くリトルタイペイと呼ばれていたが、その後中国大陸出身者が増加し、リトルシャンハイ、リトルペキンと呼ぶ方が実態に即しているという。また、ロサンゼルス郊外のローランドハイツは、富裕層の「愛人村」や「妊婦村」としても知られている。

広東人が多かったマンハッタン南部のチャイナタウンに大量の福建省の福州出身者が押し寄せて、その東側に福州人街が形成された。また、マンハッタンのチャイナタウンの中では、老華僑の広東人と新華僑の福州人との間では住み分けが行われ、郊外に第二、第三の新・中華街が形成した。

一方、華人にとってカナダはアメリカに次ぐ「第二志望」の移住先である。2006年現在、華人はカナダ総人口の4.3%を占めるようになった。バンクーバーとトロントには北米最大規模のチャイナタウンが形成されている。治安のよい郊外の衛星都市であるリッチモンドは、華人が総人口の49%（2011年）を占めるようになった。トロントには様々な移民がダウンタウンに形成したエスニックタウンがあるが、2000年代以降、中国大陸出身の富裕層はトロント郊外に四つの新・中華街を形成している。

一方、著者はヨーロッパにおいても、伝統的チャイナタウンの変容と新・中華街の形成を継続的に研究してきた。それによれば、イギリスでは、最初のチャイナタウンは港町に中国船員たちの居住地として形成された。その後、香港出身者を中心にソーホー地区に新しいチャイナタウンが形成された。ロンドン西部のクィーンズウェイ周辺の新・中華街は東南アジア系、インド系、アラブ系などの移民の姿もみられ、この地域の多様性を示

している。

パリにも三つのチャイナタウンがある。十三区の新・中華街はインドシナ難民の集住によって形成されたが、難民のうちの50%以上は華人である。

また、パリ東部のベルヴィルは、1980年代以降、増加する新華僑によって新・中華街と化した。著者はベルヴィルが新華僑のゲートウェイであり、池袋チャイナタウンと共通したところがあると指摘している。パリの中心部にある第三のチャイナタウンは、浙江省の温州や青田出身者が移り住み、中国料理店などの店舗を展開していった。著者は本章の最後で、イタリア、スペインと冷戦後の東欧における新・中華街の動向を概観し、特に冷戦後の東欧の新・中華街の形成についても論じている。

第三章 華人の〈食〉と現地社会

著者は中国料理の食通でもある。中国本土の料理はもちろん、現地化した中国料理も堪能してきた。食事をしながら、店内で聞き取り調査を行うのが、チャイナタウン研究者としての筆者の常套手段である。現地料理を食べるのが大事なフィールドワークだと評者も思う。

著者にとって一番思い出深い中国料理は、留学時代に食べていたシンガポール式の屋台料理のようである。中国料理の強みとは、移住先の食材を生かし、容易に現地化し、ホスト社会の人びとに受容され、大衆化していくことである。中国料理はまさに華人が異国の地にチャイナタウンを形成していくときの最大の武器でとなる。また、中国料理店は同胞に懐かしい祖国の食事を提供するだけでなく、同胞に雇用の機会を与える役割も果たしている。

さらに著者はいくつかの現地化された中国料理を興味深く紹介している。雑碎、春卷、甘めの酢

豚、木須肉、そして酸辣湯などがアメリカ人の好みに合わせて進化してきた中国料理である。オランダの中国料理にはインドネシア式とスリナム式がある。オランダの植民地であったインドネシアや南米のスリナムからの華人によって持ち込まれたものである。

中国の食文化は、重要な観光資源である。おいしい中国料理を目当てにチャイナタウンを訪れる観光客は多い。新華僑も中国料理を活かして、新・中華街に観光客を呼び込む努力をしている。中国料理は新・中華街の形成にとっても重要な武器になっている。

オーストリアの首都ウィーンの中国料理店で提供されるメニューの特色は、中国料理と日本料理とのフュージョン（融合）料理が多いことである。また、韓国の仁川に韓国人が好きなチャジャンミョン（炸醬麵）も山東半島の出身者によって持ち込まれ、現地化されたものである。

第四章 僑郷との絆

本章の冒頭で、著者が中国南部の伝統的な「僑郷」（華僑の故郷）を一人で巡った体験を語っている。たいへん興味深い内容なのでそのままを引用して紹介したいが、ここで取敢えて割愛して読者にぜひ本書を手にとって読んでもらいたい。

本章では、三つの僑郷について考察している。

日本老華僑の僑郷として、福建省の福清市がよく知られている。福清人は長崎に上陸し、日本各地で行商に従事した。その後、各地に分散していくが、福清人は地縁的な結びつきが強い。1980年代以降、日本への渡航ブームの結果、日本からの送金によって、福清の中心部のみならず、周辺農村部でも、高層マンションや立派な洋風の家屋が競い合って建設された。

二つ目の僑郷として浙江省温州近郊の青田県を取り上げている。青田は日本の老華僑にとっての

僑郷であると同時に、ヨーロッパ新華僑の僑郷でもある。清朝末期、青田人は特産物の青田石（葉蠟石）の加工品を持って、シベリア鉄道を経由してヨーロッパで売り歩いた。同時期、ヨーロッパより多くの青田人が日本に渡り、肉体労働や青田石の加工品を売り歩いていた。その数は5,000人以上に達したという。海外在留の青田人は124カ国に分布し、その数22万人（2003年）、うち約8割がヨーロッパに集中しているという。

三つ目に北方の新僑郷として黒竜江省ハルビン市の方正県を考察している。方正県は「新僑郷」として知られるようになったのは満蒙開拓団と深い関係がある。戦後、彼らの一部は中国残留日本人として方正県に留まることとなった。日中国交正常化後、日本人とその配偶者や子どもが日本に帰国するようになった。その後、留学や結婚の目的で相次いで来日し、2011年に日本に在留する方正出身者は約3.8万人を数えるようになった。方正県の中心市街地の店舗には、中国語と日本語を併記した看板が目立つ。華僑工業団地、日本風情街、僑村園区、中日友好園林、水稻研究者の藤原長作の記念碑などが整備されている。

第五章 国家と政治と地域社会

老華僑の中に、国内で夢を実現できず、仕方なく故郷を捨てて海外へ出て行った者は少ないと思う。そう意味では、華人は中国政治と社会の産物だと言っても過言ではない。孫文が嘆いていた「散砂の民」でも、腐敗した清王朝の打倒という孫文の革命に資金援助し、「華僑為革命之母」と称賛されたわけである。

しかし、世界各地の中国人組織団体は、中国の政治に左右されてきた。著者の研究によれば、辛亥革命の成功後、各チャイナタウンに国民党関係の団体が設立された。1949年に中華人民共和国が成立すると、チャイナタウンは国共両党の闘争

の場となった。また、中国の国連復帰に伴い、各地のチャイナタウンでは、国慶節が盛大に実施されるようになった。改革開放後、新華僑が組織した新しい組織団体の入っている建物には、中国の五星紅旗が掲揚されるようになった。

牌樓はチャイナタウンのシンボルである。改革開放後、天津市からフィラデルフィアに、上海市からリバプールに、山東省の威海市から仁川へ、それぞれのチャイナタウンに牌樓が寄贈された。チャイナタウンは、政治と無縁な空間ではないと評者は思う。

一方、華人社会では、「政治を談ずるなかれ」と考える人は多く、海外へ出て行ってもその基本姿勢は変わらない。特に海外に渡った一世の多くは「衣錦還郷」（故郷に錦を飾る）のつもりで、ひたすら働くのみであった。しかし、二世や三世などは違う。台湾出身の父親を持つ日本の民進党党首の蓮舂氏は、日本生まれ日本育ちの政治家である。一方、華人の政治参画がもっと盛んなアメリカでは、アジア系初のサンフランシスコ市長のエド・リー、またアメリカ史上でアジア系女性として初の国会議員になったジュディー・チューは傑出な華人政治家である。

本書の一節に、「在留外国人と地元社会との葛藤に関しては、当事者同士の自助努力に期待するだけ、民間、地方自治体などへまかせるだけでは解決しない。在留外国人の居住、就業、子弟の教育などの面で、長期的な視点に立った国・政府としての明確な方針と具体的対応が求められているのではないだろうか」（p.192）と、著者は日本の現状の課題を指摘している。

終章 華人社会の〈強さ〉とは何か

終章では、華人とチャイナタウンの歴史を簡潔にまとめたうえ、チャイナタウン形成の原動力を次のように分析している。すなわち、華人社会の

血縁・地縁的結びつきの強さ、華人は国境を越えることに対してあまり抵抗感がないこと、そして、華人が持っている「拝金主義」の精神である。また、海外華人社会の強みとして、容易に現地化できる中国料理と、新華僑の持続的な流入だと、著者は結論づけている。

以上、本書の内容を紹介してきたが、本書は著者の40年あまりに渡る長い研究人生の物語でもあり、その軽快な研究生活を知ることのできる貴重な1冊でもある。本書はまた、計画的・持続的に行われてきたフィールドワークで明らかにしたことを、歴史的・地域的・系統的に分析されている好著であり、これから研究者になろうと志を立てている学生、若い研究者にもぜひお薦めしたい。研究テーマの設定に困ったとき、海外でフィールドワークをするとき、本書に隠されている宝の山からそのヒントや方法を探してほしい。また、本書は著者が今まで出版してきた学術専門書と違って、現地で撮った写真をふんだんに使い、分かりやすく書かれており、地理学分野以外の幅広い読者にもお薦めしたい。

しかし、欲を言えば、本書の中で取り上げている「新・中華街」の定義はやや曖昧なところがある。本格的な中華街になるだろうと著者が予見して「新・中華街」として事例地域を取り上げていると思うが、ここでいう「新・中華街」の定性的あるいは定量的な指標がほしかった。また、世界規模でみると、中華街研究の空白地域がある。これらの地域における中華街の研究はおそらく著者の研究計画に入っているだろうが、読者の一人として、評者も次の研究成果を待ち望んでいる。

評者は、著者と一緒に中国各地でフィールドワークをしたことがある。著者の気さくな人柄は中国人から信頼を得て、現地の関係者に対する聞き取り調査がスムーズにできたことを間近に見て

感動したことがある。中国人社会を熟知している著者だからこそできたことだと思う。著者は常に謙虚に研究対象に向き合い、丁寧に話を聞き、また納得しないことについては何度も聞き方を変えながら聞き直す。こうした著者の妥協しない研究姿勢も評者にとってたいへん印象深かった。

本書の最後で、著者は南米のウルグアイの元大統領、ホセ・ムヒカ氏が来日した時の言葉を紹介している。「楽しんで仕事をしている人は幸せだ!」。著者にぴったりの言葉である。

(張 貴民)

久木元美琴：『保育・子育て支援の地理学 ー福祉サービス需給の「地域差」に着目して』明石書店、2016年10月刊、224p., 2,800円(税別)

「保育園落ちた日本死ね!」

2016年2月、ある母親のつぶやきが日本中を駆け巡った。ネット世界で瞬く間に拡散されたかと思うと、数日のうちには新聞各紙が取り上げた。

この短いメッセージへの反響がこれほど大きかったのは、インパクトの強い言質もさることながら、その背景にある、なかなか前進しない待機児童の問題の深刻さや、それに直面する母親たちの苦悩と絶望、またそうした状況に目を背けたまま既存の社会の中で「女性の活躍」を求められることに対する違和感に対し、共鳴する人が多かったからではないだろうか。そうした人々の思いが大きくなるとなったのだろう。この発言は、1か月も経たないうちに国会にまでも届いた。さらに2016年の新語・流行語大賞のトップテンにも選ばれたそうである。

常態化する保育園に入れない「待機児童」や子どもを保育園に入れるための「保活(ほかつ)」は、このところ、メディアでもしばしば取り上げ

られる。「どうにかしなくては」という主に母親たちの焦りが、彼女らを熾烈な「保活」に駆り立てており、それが注目を集めるのであろう。しかしその取り上げ方はあくまで個別的であり、話題性を狙った打ち上げ花火のようにも見える。評者は二児をもつ一人の母親として、本当に「待機児童」や「保活」の問題が社会で共有されているのだろうか、逆に母親の不安を煽り、事態をさらに深刻にしてしまっているのではないかと違和感を覚えることがある。母親たちの不安が空回りし増長されることなく、子どもにとっても保育者にとってもよい環境の保育が実現するためには、個々の問題を全体の問題として共有化し、そのうえで冷静に着実な対策を練っていくことが求められよう。

より抜本的な対策が必要なのは言うまでもない。ただしこれには中長期的な視野が必要で、当然時間もかかる。しかし一方では、今「待機」を余儀なくされている人にとって、10年後の解決では意味がなく、簡易でも即効性のある対応が求められている。この両方の間でいかに折り合いをつけながら対策が進められるべきなのか、行政、施設、保護者、保育者がそれぞれどのように関わるべきなのか。なかなか正解が見えにくいなか、保育をめぐる地域固有の問題とローカルな対応の在り方をまとめた本書は答えの一つを示しているようである。

本書は、保育をめぐる「多様化」と「地域」を軸に構成されている。保育の需要は世帯構成、女性就労の状況、子育て世帯の生活・就業のパターンによって左右されるが、これらは地域差が大きい。少子化や働き方の多様化、子育てに関する価値観の変化を背景に、保育のニーズは多様化しており、それを担う有力な存在として期待されるのが「地域」でもある。本書では、保育ニーズの多様化に対する地域的対応とその背後にある社会・